

小説家アンドレ・レオの《アンガージュマン》

金山 富美

I. はじめに

1871年のパリ・コミューンは、それ以前の種々の革命時と比較して、特に多くの女性が関心を寄せ、また女性自らも参画を試みた場であった。その自治政府としての機能はわずか70日余りの短命に終わり、女性参加者がその牽引車であったともいえないが、女性たちはさまざまな場所でそれぞれ大きな役割を果たした。

たとえば、《ラ・マルセイエーズ》を断固として拒否する人々ⁱのために、それをもじった《コミューンのラ・マルセイエーズ》を作詞したとされるジュール・フォール夫人(旧姓ド・カステラーヌ)もその一人である。夫人の人となりについて詳細は不明だが、詩を紡ぐことのできる豊かな教養を備えたブルジョワの婦人であっただろうと想像できる。「君主おらずとも民衆は糧(パン)を得られる」という歌詞には、日々の生活の香りが漂うと同時に、社会の底辺で暮らす人々への情け深く、温かい眼差しを感じ取ることができる。

多くの労働者で構成されるコミュニューたちが歌ったこの《コミューンのラ・マルセイエーズ》には、敵に決して背を向けない戦いの意志が示されている一方、「いや、もう王も冠もいらぬ、流血も喪の悲しみもたくさん」(第三番歌詞)、「もったいぶった美辞麗句も、意味のない空言ももうたくさん」(第五番)ⁱⁱなどの歌詞に見られるように、本歌には認められない非人間的かつ無益な争いに対する反戦の願い、そしてキリスト教理を含むあらゆる鎖からの解放も叫ばれている。人々を引きつけ一つにまとめる率直で力強いそれらの言葉は、ルイーズ・ミシエルの表現を借りて、「おそらく女が反抗を好むというのは事実」であるから、そしてまた「伝統的慣習的に居るべき場所」とされた家庭から外

ⁱ ルイーズ・ミシエルは「臨時国防政府に欺かれていることに気づいた愛国心溢れるパリの人々は、第二帝政時から都合よく利用されてきた経緯から《ラ・マルセイエーズ》を冒読された歌だとし、この国歌を歌おうとはしなかった」と証言している。Louise MICHEL, *La Commune - Histoire et souvenirs*, La Découverte, 1999, p.71.

ⁱⁱ Robert BRÉCY, *La Chanson de la Commune*, Les Éditions Ouvrières, 1991, p.68.

へ眼差しを向けはじめたばかりの女性たちが「男ほどには権力によって墮落させられていなかった」ⁱⁱⁱ から生まれ、帝政瓦解を機に進ったのだと考えても、あながち間違いではなからう。

フォール夫人と同様、パリ・コミューンが掲げた既存社会への異議申し立てに自らの言葉をもって積極的に関与し、その第一線で活躍した女性がアンドレ・レオである。レオは、ルイーズ・ミシェルと並び、自他ともに認めるコミューンズの一人として、コミューンの実質的な活動にも加わっている。この女性は「血の週間」を生き延び、その後の亡命生活のなかでも社会の不正に対してペンを折ることなく、生涯を終えるまで自らの言葉で問題提起をし続けた。ルイーズ・ミシェルが革命家となった背景には、彼女の詩人への憧れがあり、ミシェル自身詩人として、天が詩人に与えた崇高な使命を遂行しようとする意志が、彼女の過酷な闘いを支えていた^{iv}。同様に、社会活動家としてのレオの出発点にもまず、ペンの道を進もうという決断があった。事実、レオは小説家であった。

ところで、批評家ミシェル・ラゴンは皮肉交りに、「民衆表現文学」が、今なお根強い「偉大なブルジョワ作家」とその社会階層の価値観によってないがしろにされ、常に文学の外部に取り残されたままである、と語る^v。「女性の手による文学」も、それと同様の憂き目を見てきたといえ、一旦忘れ去られれば、再び浮上することはめったにない。レオの場合、彼女が作家として顧みられることがなかったのは、やはり「ブルジョワ民主主義」に物申したパリ・コミューンの活動家であったことが決定的な理由であり、しかも、そこで「女だてらに」ペンの力を発揮したことが、「ブルジョワ」の文壇においては完全に否定的要素として働き、結果として拒絶されざるをえなかったと想像できる。しかし昨今、アンドレ・レオが残した文学的遺産をもう一度掘り起こす動きがある。

女性の言語表現は、その社会参画の道程と切っても切れない関係にあることを念頭に置きながら、本稿では、フランスであらためて光を当てられているレオの文学の道程を追い、この作家が当時の社会、また女性が直面していた問題

ⁱⁱⁱ MICHEL, *op. cit.*, p.119.

^{iv} Voir: 拙論「ルイーズ・ミシェルの詩学」『鳥大言語文化』第36号, 2014, pp.45-66.

^v ミシェル・ラゴン『フランス・プロレタリア文学史—民衆表現の文学』高橋治男訳, 水声社, 2011, pp.9-39.

点をいかに意識的にとらえ、表現しようとしたかについて紐解いていきたい。

II. パリ・コミューンの「声」

レオが綴った文章のうち、後世の人間がもっとも多く目にしてきたのは、やはり、1871年4月10日に「パリの労働者」と署名のうえ発表された「農民への手紙」だろう。ミシェルヤリサガレー^{vi}をはじめ、パリ・コミューンの足跡を書き残した書物には、それが必ず引用される。

社会主義の理想を目指したパリ・コミューンは、同じ目標と希望を、地方の労働者や農民と分かち合おうとした。しかし、地方の民衆がパリの民衆以上に教育や啓蒙の機会をもたないまま過ごしてきたことを考えると、彼らの心に訴えるメッセージをいかに用意するかが問題になった。その難しい役割を引き受けたのが、アンドレ・レオだったのである。彼女はコミューンを代表して、次のように未来の仲間への思いをしたためた^{vii}。

兄弟よ、あなた方はだまされています。私たちの利害は同じものなので、私が要求しているものは、あなた方もまた望んでいるもの。私が求めている解放、それはあなた方の解放なのです。抑圧する者の名前が大地主でも、工場主でも、そこに違いはありません。

あなた方にも、私にも、自由、余暇、知的で心地良い生活が欠けており、あいかわらず貧しさにあえいでいます。

[中略]

農村で働くみなさん、パリが望んでいるのはただひとつ、農民に土地を、労働者に道具を、すべての人々に労働を、ということです。

パリの大義はみなさんの大義でもあり、パリは労働者のため、そして、あなた方のためにも骨を折っています。

あなた方がよくわからないまま選んでしまった代議士たちは、アンリ五世^{viii}を連れ戻そうと企んでいます。パリが陥落すれば、みなさんの首は貧しさのくびきをかけられたままです。そして、それとまったく同じく

^{vi} MICHEL, *op. cit.*, p.197, リサガレー『パリ・コミューン』（上）喜安朗・長部重康訳、現代思潮社 1973, p.284.

^{vii} 本論では、以下に記載の引用を拙訳している：Jacques ROUGERIE, *Paris libre 1871*, Édition du Seuil, 1971, pp.190-192.

^{viii} ブルボン家最後の王位継承候補であったシャンボール伯アンリ・ダルトワを指す。

びきが、みなさんの子供の首に移されてしまうでしょう。だから、どうかパリが勝利するよう、手を貸してください。

何が起ころうと、次の言葉を忘れないでいてください。

一農民に土地を、労働者に道具を、すべての人々に労働を—
パリの労働者

「農村労働者へ」と題したこのアピールは十万部印刷され、人の手で地方へ、あるいは気球を使ってパリ近郊にまかれたという。だが残念ながら、ヴェルサイユ政府のありとあらゆる妨害によって、このメッセージが農民の手許まで届くことはほとんどなく、結局、農民層はヴェルサイユ政府に与し、パリ・コミューンの破滅に加担することとなった。

リサガレーは、レオの文章を「流れるような筆致」と形容し、農民に宛てた手紙については「純真で真心のこもった」「農民に理解しやすい内容」だと称賛を惜しまない^{ix}。また、ルイズ・ミシェルは6歳年上のレオを、マリア・ドレームやナタリー・ルメル^xと並び、もっとも学ぶことの多かった女性の一人だと語っている。ミシェルは、これら3人のいずれも、いく重にも重なる社会的不平等に屈することなく、男性の視座を拒否して自らを鍛え上げてきた有能な女性だと評価していた。

1870年以前から、ミシェルはレオが自宅で開く集会に出入りし、民主的で平等な社会を願うブルジョワ婦人、自由主義思想のブルジョワ、共和主義者、また急進派の社会主義者など、多くの志の高い男女と知り合ったようだ。一方レオは、自ら貧民地区に出向くなど、思考を行動へと移すべきとするミシエルの提案に応える。こうしてミシェルとともに、長く無言のまま捨て置かれた下層階級の女性の肉声をすくいとり、彼女たちに語りかける活動を増やしていった。70年8月14日のラ・ヴィレット事件の際も、ミシェルと手を携えて、死刑宣告を受けたブランキ派の友人のために減刑の署名活動を行い、その署名簿

^{ix} リサガレー、*op. cit.*, p.261, p.284.

^x マリア・ドレーム(1828-1894)はフェミニストの作家であり、フランス女性として最初のフリーメーソンとして、また「もっとも知的な男性にひけをとらない女性」として知られた。フリーメーソンのジャーナリスト、レオン・リシェールとともに、1869年「女性の境遇改善推進協会」を創設した。ナタリー・ルメル(1827-1921)は庶民出身であり、フェミニストでもない。この人物はインターナショナル・フランス支部の中心的な存在で、パリの社会主義的、国際主義的な労働組合運動の牽引車の一人であった。

を届けるために、果敢にもパリ軍管区司令官のトロシュ將軍のもとに出向いている^{xi}。さらに、ストラスブルグがプロシア軍の爆弾攻撃に傷つきながら抵抗を続けていることを知ると、レオは義勇隊のリーダーの一人として、市庁舎へと行進した。

この時、レオはすでに40歳半ばを超えている。パリ・コミューンの声としての筆力、そして社会活動に自らの命を賭けた決意、その哲学は、いかにして鍛えられたのかを、以下考えてみたい。

Ⅲ. 小説家としての歩み

アンドレ・レオは、本名をヴィクトワール・レオディル・ベラという。レオディルは1824年、ヴィエンヌ県のリュジニャンに誕生した。祖父はフランス大革命期に活躍し、「憲法友の会」の中心人物の一人であった。父親は公証人であり、治安判事も務めた。啓けた思想をもつ家庭で、レオディルは男子にひけをとらない教育を与えられ、祖父と父が集めた蔵書を読んで成長したようだ。

25歳を過ぎ、7歳年上のグレゴワール・シャンセと出会い、彼を人生の伴侶と考え始めた頃^{xii}、レオディルは初めての小説『ある老嬢 *Une Vieille fille*』を書く。この「老嬢」というテーマは、『ウジェニー・グランデ』『従妹ベット』また『ベアトリクス』といったバルザックの《風俗研究》で、部分的ではあれ、すでに語られてきたものだ。現実には、19世紀半ばを過ぎてはまだ、結婚は女性にとって唯一無比の花咲く道というのが一般的な考えであり、そこから外れた娘、あるいはその決められた運命をよしとしない女性は、いくらかの哀れみと侮蔑を込めて「老嬢」の形容を冠されていた。執筆当時のレオディルもまた、そのように呼ばれる年齢に達している。先駆的な考え方もつ家庭に育ちながらも、彼女自身、おそらくシャンセと結婚するまで、周囲からそのような眼差しを向けられ、憂き目を見たであろうことは容易に推測できよう。

『ある老嬢』の物語はスイスのローザンヌを舞台に、ある青年が34歳の女性に恋をし、結婚にまで至るという粗筋である^{xiii}。そこでレオは、女性の容貌に

^{xi} レオ、そして作家でジャーナリストのアデル・エスキロス（1819-1886）を加えた3人で人民の意志を伝えた、とミシェルは証言している。MICHEL, *op. cit.*, p.63.

^{xii} シャンセはナポレオン3世の帝国から国外追放され、スイスに亡命した。そのシャンセをレオディルは追いつき、1860年までローザンヌで過ごす。

^{xiii} *Bibliographie d'André Léo sous la direction de Cecilia Beach* (<http://www.andreleo.com/>) を参照のこと。

とらわれるのではなく、女性にもそれ以外の「人間」としての美質、つまり男性と同様の知性、優しさ、誇り、自立の精神を称揚する。ここには、『ペアトリクス』で作者バルザックがカミーユ・モーパンに与えた悲しい宿命^{xiv}とはまったく異なる女性の未来が示され、さらにサンドが『フランソワ・ル・シャンピ』の主人公フランソワに与えた決断やマドレーヌに与えた運命よりも力強い主張がある。

『ある老嬢』を自費出版で発表したその年、レオディルはシャンセと結婚し、レオディル・ベラ＝シャンセとなった。シャンセは思想家ピエール・ルルーの信奉者であり、国語教師の傍ら、人間の連帯、プロレタリアートの解放を目指し、ジャーナリストとしても活動していた。

レオディルは、父や共和主義者の友人の影響によって以前から社会主義運動や革命に深い関心と共感を抱いていたが、シャンセとの間にできた子供を育てる傍ら、第二帝政に物申す夫の論説に自らも積極的に関与するようになる。ジョルジュ・サンドがルルーに深く傾倒したのと同様に、レオディルもまた、社会主義思想家の精神的遺産をくみ取り、それを深めていったのである。サンドほどの神秘思想には走らなかったが、人道主義的側面においてはサンド以上に問題意識を豊かにもち、それを自らのテーマとして大きく膨らませていったことは、『ある老嬢』の後、30歳にして授かった双子の男児を育てながら、『あるスキャンダラスな結婚 *Un mariage scandaleux*』『ある離婚 *Un Divorce*』などの問題作を意欲的に自費出版していったことからもうかがい知れる。

幼い頃から社会の至るところで目にしてきた差別や女性の隷属の問題は、夫シャンセが指摘する様々な社会的な問題と重なったのに違いない。女性が相変わらずこうむらざるを得ない社会的不正を、今こそ組上にのせ、白日のもとに描き出さないではいられなかった。レオディルの小説にはすでに、今で言うところのジェンダーの問題を示唆しながら、権力とは、愛とは、そして家族とは何かまでが問われている。

ところで、レオディルが自費出版せざるをえなかった理由としては、女性を正当な作家とはみなさず、女性に書く教育を与えたことさえ後悔すると言いつ者が同業者にさえ少なくなかった、という事情^{xv}があった。また、そうした

^{xiv} Voir : 拙論「フランスにおける女性作家誕生の苦難：ミューズではなくデミウルゴスとして」（『島大言語文化』第14巻，2003，pp.69-88.）

^{xv} 文壇に根強く存在していた女性差別の一つの例として、ジュニウス（カスタニヤリ、アル

環境が、女性の本名による出版を社会的タブーにしていたことから、レオディルは自らの名を男性名に替え、第一作『ある老嬢』に「レオ」と記したのだ。前世紀のように「～夫人」ではなく、サンドと同様に自らペンネームを選んだ彼女は、より良い未来へと志向する人間の精神を信じ、その未来創成のために、書くという行為を通して献身しようとしたのであろう。

1860年、シャンセは祖国への帰還を許され、翌年61年に家族はパリに落ち着く。教師の職を完全に辞し、本格的にジャーナリストとしての道を歩むことにしたシャンセは、アルマン・レヴィとラディスラス・ミケヴィッチ^{xv}が創刊した日刊紙『希望 *L'Espérance*』の統括責任者となった。夫とともにレオディル自身も執筆に励み、小説第二作目を書き上げて『希望』に発表した。それが前述の『あるスキャンダラスな結婚』である。この時、レオディルはそれまでペンネームとしていた本名の一部である「レオ」をやめ、改めてアンドレ・レオと定めた。シャンセとの間に生まれた双子、アンドレとレオの名前を合わせたものである。そして、第二作目に引き続き、今度は愛と平等に基づく結婚の重要性を訴える『ある離婚』を書き上げ、『ル・シエクル *Le Siècle*』紙に発表する。

子供の名を自らのペンに冠した時、レオディルの臉には、近い将来、愛する子供たちが住む社会が映ったのではないだろうか。その社会は多くの人にとって今よりも好ましいものか否か。双子の母はおそらく、その舵取りの行方を左右する責任が自らの世代にあり、そこで大きな意味をもつようになるのが女性の目覚めであると考えたに違いない。彼女が書き上げた三つの小説は、いずれもが、タイトルに雄弁に語られる通り、強い政治的社会的な匂いを放っているため、当時は、表紙を一瞥するだけで眉をしかめる向きもあっただろう。だが一方、「ある～」という例示の形式を打ち出したことで、その題名は女性をはじめ多くの人々の関心を引く力も備えた。未来の基盤作りに献身しようというレオディルの強固な決意は、作家アンドレ・レオとしての筆力を高める。『あるスキャンダラスな結婚』は当初、自費で出版されたが、まもなくアシル・フォール社が刊行を引き受け、好評を博した。

フォンス・デュシェーヌ、アルフレ・デルヴォの三作家のペンネーム)が『フィガロ』紙に掲載した女性作家批判がある。Voir: Louise MICHEL, *Je vous écris de ma nuit – Correspondance Générale 1850–1904*, Les Éditions de Paris, 1999, pp.60-61.

^{xvi} ポーランド最高の愛国詩人と呼ばれたアダム・ミケヴィッチの息子で、当時フランスに亡命していた。

この小説はレオの故郷が舞台である。裕福なブルジョワ家庭と斜陽の家族、そして貧しい農家が、当時さぞかしそうであったろうと思われるほどに実に細やかに描写されており、それを背景にして、日雇い労働者の青年ミシェルと中産階級の娘リュシとの恋愛が主題として流れる。そして、若い二人の純朴で情熱的な恋愛に、何世紀も続いてきた伝統、慣習、宗教的な問題、さらに相続問題、出世欲などが介入し、二人の結婚を妨害する。こうして展開するドラマにおいて、「スキャンダラスな結婚」とは、ミシェルとリュシが切望する愛の形であり、それが周囲の勤める（実際には強いる）「理性的な結婚 *mariage de raison*」と対置されるのだ。作者レオが、後者の「理性的」という表現の裏に隠された世間の打算、欺瞞、伝統墨守を明るみに出そうとしていることは、言うまでもない。

『あるスキャンダラスな結婚』をジュール・ヴァレスは次のように称賛した。

この小説は情景に満ち溢れている。[中略] 時に詳細すぎるくらいもあるが、単なるイメージではなく、そこにある真実が切り取られており、ブドウ畑の斜面のブドウの木の本一本が目に見えるようだ。とはいっても、文章が、自然の備える健康的な美をかき乱すというようなことは、決してなされていない。[中略] 小説家が心乱されないでいればそれだけ、小説そのものは人の心を打つ。[中略] 『あるスキャンダラスな結婚』の作者は、間違っても説教じみた調子に陥ることなく、その事象自体に語らせ、物語と描写から生まれる印象を信頼している。^{xvii}

ヴァレスはまた、レオの描く登場人物もきわめて「あるがままである」^{xviii}と、その描写力に感服した。

『あるスキャンダラスな結婚』の成功によって、レオは第四作目『プリシオン氏の二人の娘 *Les Deux Filles de M.Plichon*』もまた、アシル・フォール社から発表することができた。相反する性格を備える二人の姉妹を主人公にしたこの作品について、ヴァレスは、レオの作家としての才能は認めながらも、結婚の問題ばかりを取り上げている点を指摘し、描写よりも理論が勝った印象が否

^{xvii} Jules VALLES, 《*Les Romans nouveaux*》, Progrès de Lyon, Œuvres, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1975, tome 1, pp.403.

^{xviii} VALLES, *op. cit.*, p.400.

めない」と述べて、その小説としての価値を十分なものとみなさなかった^{xix}。

おそらくヴァレスは無意識のうちに、田園を舞台にみずみずしい自然と素朴な人々を配し、ロマン的であるとともに人を慰める小説を世に出したサンドを念頭に置き、レオをサンドと引き比べて評価していたのではなかっただろうか。すでに大御所のサンドを女性作家の「本家本元」とするならば、他の女性作家がいかに優れた点や個性をもったとしても、サンドという指標より上位には置かれないだろう。極端に言えば、「サンドの再来」か「二番煎じ」の間を浮遊するかのように述べられるだけのことである。

レオのペンは、サンドの場合と同様に虐げられた人々のために捧げられたが、なかでも女性をあらゆる意味で、またあらゆる場面で法律や制度にもっとも拘束される「階層」と把握し、そのうえで女性に対して優しい眼差しを投げかけ、彼女たちが自ら殻を破り、向上しようとする姿を、具体的で詳細に、力強い筆致で伝えようとしたのである。いきおい、描くというよりもむしろ語る傾向が色濃くにじみ、ジャーナリスティックな印象が強く残ることとなる。登場する女性たちは、サンドに描かれる主人公と比べて、より意志的に自らを主張する。

実をいえば、書き手であるレオ自身が、それまで以上に意志的に、そして従来にも増して理論武装をして歩まなければならない時がすでに訪れていた。より良い社会の実現を掲げ、敬愛する夫と使命感を共有した日々は、1863年、ジャンセの病死によって終焉を告げていたのである。レオは一人で家庭を支えなければならず、他方、文筆家として一層自立し、それと並行して、社会変革のための闘争者として自ら成長する必要に迫られた。それを契機として、レオのペンはジャーナリストのそれへと向かったのではなかったかと考えることができる。

1868年、『オピニオン・ナショナル *Opinion Nationale*』に発表した小説『アリーヌ＝アリ』は、主人公の娘アリーヌが自分の居場所を見出す物語である。アリーヌは、服従でしかない結婚を拒否し、男装のうえ名前も男性名アリと改めて、より広い世界の発見と多くの人々との出会いを求めて旅立つ。途中、ある若者と出会い、一時は互いに信頼し合い、愛し愛される関係を築くことができると感じたが、自分とはいかなる存在かを問う術を知った時、娘の心に疑念

^{xix} VALLES, *op. cit.*, pp.438-445.

が生まれる。葛藤の末、アリーヌは、社会や政治活動への参画に自らの人生の意味を見出す方を選び、社会変革を目指して、女性の教育向上と女性の労働問題のために力を尽くすことを決意する。アリーヌはもがき苦しみながらも、ちょうど蛹が蝶へと脱皮して自らの世界を自由に舞うように、男装という形態だけに留まらず、彼女という存在そのものをアリーヌ＝アリへと変貌させたのだ。

スタンダールは小説を「大通りに沿って運ばれる鏡」に譬えたが、それに倣うなら、レオの小説は、社会が女性に辿るべきものと強いてきた道筋に置かれたいくつもの鏡だといえよう。ただし、その鏡の中に読者は、伝統的な風景を果敢に砕くヒロインの姿を目にするのである。敷設されてはいるものの、その先に未来の兆しが見えないレールを断ち切って、彼女たちは新しい道を求めようと試みる。そんな主人公を前にして、読者もまた、それまで見えていなかったいくつもの可能性を発見し、文字通りの未来を指向するよう促されていくのである。

IV. コミュニーズから再び小説へ

レオの活動はこうして、文学から政治、そしてフェミニズムそのものの運動へと展開していった。『オピニオン・ナショナル』にアメリカの女性運動に関するエッセーを書き、『ル・シエクル』には「女性と慣習」と題して、当時の思想及び文化的牽引車だったプルドン、ミシュレ、バクーニンのイデオロギーについて、先入観を交えることなく論じた^{xx}。

1866年には「女性の権利協会」を創立し、3年後それを「女性の権利要求の協会」と名称変更すると、男女両性の教育の平等、結婚制度の見直しなど、目的をより明確化させ、それらの課題が法的枠組で保証されるよう要求した。1867年、ブリュッセルの新聞『協力 *Coopération*』にプロレタリア、織物労働者を擁護する記事を執筆して以降、レオの活動の幅はさらに広がる。

1868年、バクーニンが責任編集を行うスイスの「労働者のインターナショナル会」誌『平等 *L'Egaite*』にもペンをふるう。レオは、社会がよりよく変わるために、女性はまず自分の境遇がいかなるものかを意識すべきであり、それ

^{xx} 「女性と慣習」は哲学的で示唆に富む論文である。ルグーヴェヤデュフルの著作やその思想を辿るなど、思想史としても読みごたえがあり、ボーヴォワールの『第二の性』の論理展開を想起させる。あらためて取り上げ、論じるべき作品である。

と同様に労働者もまた、自分たちの苦しみの原因を知る必要があると考えた。そして、1871年には月刊『ラ・ソシアル *La Sociale*』を創刊、主幹として「女性も男性とともに *Toutes avec tous*」と題する論考を掲載し、女性も男性と力を合わせ、手を取り合って闘争に打ち勝とうと鼓舞した。4月8日付、10日付の紙面では、ヴェルサイユ政府を相手にイシーとシャティヨンの前線にあった友人ルイズ・ミシエルの姿を「まさに偉大で、賞賛に値する、威厳ある勇気でもって戦っていた」と伝える。前述したように、レオはまさにパリ・コミューンの声であった。

「血の週間」を逃れ、亡命中も、レオはポール・マンクラとともに平和と自由のために活動し、健筆をふるった。1880年、恩赦でパリに帰還し、何編か論説を書くが、次第にそのペンは再び文学へと帰っていく。

作家レオにとって文学とは何であり、またジャーナリストとしての歳月は彼女に何をもたらしたのだろうか。ルージュリは当時の多くの史料から「もっとも明確な社会主義の言葉が聞かれたのはおそらく、女性のクラブであった」^{xxi}と述べるが、レオがその期間を経て最終的にたどり着いた文学とは、どのような姿であったのか。このことについては、あらためて問わなければならない。少なくとも、小説家としてのレオとジャーナリストとしての彼女を分かつことはできないだろう。

《コミューンのラ・マルセイエーズ》は「フランスの民衆よ、目覚めよ。時の鐘が鳴っている、おまえを救済する時の鐘だ」(第三番)と歌ったが、レオは、小説においても論説においても、「救済の鐘」を鳴らし続ける使命を自身に課したのだと言える。ヴァレスはじめ当時の批評に看取される「ポスト・サンド」＝アンドレ・レオではなく、レオ独自の文学表現を彼女のジャーナリストの視点と関係づけながら、新しい時代の新しい観点から検討していく必要がある。

参考文献（脚注に記載したものを除く）

- ・ André LÉO, *Écrits Politiques*, Éditions Dittmar, 2005.
- ・ André LÉO, *Un mariage scandaleux*, Cahiers du pays chauvinois, 2000.
- ・ André LÉO, *Aline-Ali*, Editeur Nabu Press, 2014.

^{xxi} ROUGERIE, *op. cit.*, pp.236-237.

- ・ Carolyn J. EICHNER, *Surmounting the Barricades - Women in the Paris Commune* -, Indiana University Press, 2004.
- ・ Corinne SAMINADAYARS-PERRIN (Université Montpellier 3/ RIRRA 21) , <http://web.me.com/csaminadayar> Contribution au colloque L'Anti-critique des écrivains au XIXème siècle Université de Caen, 20-21 octobre 2011.
- ・ Lucienne MAZENOD et Ghislaine SCOELLER, *Dictionnaire des femmes célèbres*, Robert Laffont, 1992.
- ・ Rober BELLET, *André Léo, écrivain-idéologue*, Revue dix-neuvième siècle No.77, 1992. (http://www.persee.fr/doc/roman_0048-8593_1992_num_22_77_6054)